

〈研究ノート〉

## 甲骨版上の毛筆書写文字

Characters written with a brush (毛筆) and ink (墨 or 朱) in Yin Dynasty

末次 信行<sup>1</sup>

### 要旨

1965年、貝塚茂樹は「甲骨文と金文の書体」というテーマで、殷代後期の書体の変遷について一説を提起する。甲骨文の書風の変化は、最終的に筆写体へ向かい、鹿頭文字と殷代後期の金文は、より筆写体の原物に近いものがあり、さらに筆写体をもとに金文の書体は分化し変化したと結論した。つまり、当時の「識字」者たちの標準的書体は、筆写体であり、「甲骨文と金文の書体」の基底には、筆写文字が常に意識されていたとした。本稿は、この貝塚説を踏襲し、その後の考古学的発掘による成果を加えて、周初までの筆写文字の系譜について述べたものである。

キーワード：毛筆, 墨書, 朱書, 甲骨版, 殷代

### 一、はじめに

2019年9月26日から30日にかけて、第七回世界漢字学会（於立命館大学）があり、発表のための論文『筆写文字の系譜－殷末周初までの標準書体を中心に』を作成した。論文作成の主旨は、貝塚茂樹説を踏襲し、当時の「識字」者たちの標準的書体は、筆写体（曲線イメージ）であり、「甲骨文と金文の書体」の基底には、筆写文字が常に意識されていた、ということを中心とするものであった。そこでは、甲骨版以外（陶器・玉器・石器）の毛筆書写文字の具体例については検討できたが、甲骨版上のそれについては、紙幅の制約上、簡略となった。

そこで、本稿は古いに用いられる亀甲版と骨版上の毛筆書写文字を中心に述べたい。これに先んじて陶器・玉器・石器上の毛筆書写文字を簡略にとりあげ、同時に毛筆書写文字について概説したい。

### 二、毛筆書写文字概説

毛筆書写による文字、いわゆる筆を用い朱や墨で書かれた文字は、殷代後期（前1300～前1046）にすでにあった（絶対年代は『中国歴史紀年手冊』による。一応の目安で絶対的なものではない。以下同じ。）。

毛筆について、董作賓は小屯近くの後岡出土の

仰韶期彩陶上の図絵を根拠として、4500年以上前から存在すると推測し（「甲骨文断代研究例（十、書体）」）、また、毛筆で書かれた文字のある殷墟の発掘品について、「三千年前毛筆書写之文字」に、それらの写真を掲載している。

書写される素材には、甲骨版や陶器や玉器や石器などがあり、それらに朱書や墨書で文字が記されている。すでに、陳夢家は「書辭」例として甲骨・玉器・石器・陶器に分け、取りあげている（『殷虚卜辞綜述』第一章總論第三節・第七節）。

本稿末尾添付の「筆写文字資料一覧」（以下「一覧」と略称する）は、甲骨版・陶器・玉器・石器などの素材に毛筆で書かれた文字の諸例である。「一覧」は不鮮明な文字や、文字の写真や模本のない報告も含め、都合90件を越える数になる。識別可能な文字総数は、延べ400字、あるいはそれ以上になる（殷代後期以前の例をふくむ）。

「一覧」①付図（模本）は、陶寺文化晩期（約前2200～前2000）出土の扁壺にみえる朱書文字「文」である。図からは「文」以外に2つの「文字あるいは符号」がみえる。李健民は「朱書“文”字偏于扁壺鼓凸面一側、有筆鋒、似為毛筆類工具所書」（「陶寺遺址出土的朱書“文”字扁壺」）とし、「筆鋒」が見られるところから、「毛筆類」を使用した文字と推定する。模本の「文」字の取筆には、筆鋒（尖り）があり、筆写した時に生じる特徴が見られる。

「一覧」②付図は、甲骨文字出現以前（殷代中期）

1 Nobuyuki SUETSUGU 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2019年9月6日

の例で、朱書文字「二・天・尹・𠄎3356?・句?・帝・匕(人)・東・夭・三・阜1273?・七?・𠄎1976?」などがみえる。殷代中期の鄭州小双橋遺跡(前1435~前1412)出土の陶器残片上の朱書文字で、とりわけ「尹」の文字には、起筆と収筆ともに、筆鋒(尖り)があり、その起筆と収筆の間の筆画の線の太さは、やや太めとなっており、貝塚茂樹のいわゆる肥筆風で、筆写の特徴が見られる。

「一覧」③付図(模本)は、甲骨文字出現前の殷墟出土の例とされ、朱書文字「口…口弋?畢征雨」の6文字がみえる。6字は陶器(鉢)の内側にあり、「弋?」と「征」の一部に蔵鋒がみられるが、筆画の先端のほとんどに筆鋒(尖り)がみえ、全体としては、肥筆風の文字といえる。曲線の目立つ書風という感じである。

「一覧」④付図(写真)は、殷墟文化第四期とされる陶器上の書写例である。写真の右が白陶残片にみえる墨書の「祀」、左は骨版に刻字された「祀」であり、書写されたものではない。董作賓は「白陶残片上之墨書」として、この写真を掲載し、加えて「骨版上の『祀』字、同時同坑出土」と記す(「三千年前毛筆書写之文字」)。この骨版刻字(甲3687=合集37834)と陶器残片は、いずれも小屯のE181出土であり、ともに殷墟文化第四期に属す(鄒衡「試論殷墟文化分期」図一)。白陶残片上の「祀」の「示」の横画は筆柄をやや斜めにして打ち込み、そのままもしくは右上に払う形、いわゆる永字八法の「策」にあたる運筆がみえる。ちなみに徐暢は「如『祀』字墨書陶文、横画落筆時用筆斜按後向右或向右上挑出」とし、この「側鋒」による書画のみえる文字の書体を「手書体」とする(「春秋戦国刻石簡牘帛書書法概論」13頁)。しかし、縦画はいずれも起筆と収筆に筆鋒がみられ、一画の線には膨らみがあり、肥筆風となっている。白陶と骨版、毛筆字と刻字との違いはあるが、字体や書風は同じである。

「一覧」⑤付図は、残玉上の朱書文字「龔于丁」で、安陽出土品とされる。これらの文字の筆画の先端に筆鋒(尖り)がみえ、筆画の線の太さには膨らみがある。いわゆる肥筆である。

「一覧」⑥付図(模本)は、武丁期前後の玉戈にみえる朱書文字「在洮執夏?在入」である。7字みえる。戈は武器の一種。婦好墓と同時代とされる墓(M18)から出土した(「安陽小屯村北的兩座殷代墓」図11-1)。写真は不鮮明であるが、模本では、いずれの文字も肥筆風に書かれている。甲骨

文字とも共通の文字がほとんどである。「洮」と「夏?」は地名か氏族名など(固有名詞)である。この玉戈にみえる朱書文字について、徐暢は「波磔体」とする(「春秋戦国刻石簡牘帛書書法概論」11頁)。

「一覧」⑦付図(模本)は、殷墟文化第四期すなわち帝乙・帝辛(紂王)の時代の玉璋にみえる朱書文字である。玉璋残片(17片)のほとんどに「?于某或一」との文の形でみえ、「某」には「白・辛・小史・公・祖甲」などの、固有名らしき文字などが入る。都合48字。殷墟劉家莊南の殷墓(M42,54,57,64)出土である。内訳はM42から1片(図1)、M54から7片(図2~8)、M57から4片(図9~12)、M64から5片(図13~17)となる。模本から字体を検討すると、「一(M42,54,64)」や「于(M54,57,64)」の横画は、側筆で起筆され、収筆には筆鋒がみられ、細く尖っている。運筆に速度を感じさせる。筆を打ち込み、そのまま右もしくは右上にハネる、「永字八法」の「策」に近い筆画になっている。換言すると、肥筆の運筆速度に比較して、スピード感がある。なお、この玉璋の朱書文字について、徐暢は「手書体」とする(「春秋戦国刻石簡牘帛書書法概論」13頁)。

「一覧」⑧付図は、石器上の墨書文字「小戠出」で、西北岡1001号大墓出土とされる(陳夢家「書辭」引用例)。西北岡1001号大墓の造営時期は、殷墟文化第二期に属すとされる(『殷墟的發現与研究』)。董作賓は「石器上之墨書」とし(「三千年前毛筆書写之文字」)、胡厚宣は「朱書石牌」とする(『殷墟發掘』図42)。発掘時の写真を示す董作賓にしたがい「墨書」としておく。起筆と収筆は細く尖っており、起筆と収筆の間の筆画の線はやや太く、肥筆の典型例といえる。この石器上の文字について、徐暢は「朱書石牌」とし「波磔体」の例とする(「春秋戦国刻石簡牘帛書書法概論」11頁)。

「一覧」⑨付図は、石磬の朱書文字「小臣??挿1038?」である。陳夢家『殷虛卜辭綜述』図版17に、写真と模本が付されているが、写真は不鮮明である。模本から判断すると、細目の勁い線の、鋭い曲線が基調となっている。時代について、陳夢家は「晩殷時期」とする(『殷虛卜辭綜述』46頁)。

「一覧」追加資料⑧(模本)は、殷墟文化第四期晩期、すなわち帝辛(紂王)の時代の石璋にみえる墨書文字である。石璋の正面中部に「尊于某」との形で書かれ、「某」には「大子丁」「祖乙」「祖丁」「子癸」「長子癸」「中子癸」「三辛」「巫辛」「君乙」「君丁」などの固有名が来る。18件の石璋にみら

れる。殷墟劉家莊北の殷代貴族墓（M1046）から出土し、同出の陶器と青銅器から、この墓の時代は「殷墟四期偏晩」で「帝辛時期」と結論する（「安陽劉家莊北1046墓」）。「尊」の积字は程鵬万に従う（「劉家莊北M1046出土石璋上墨書“？”字解釈」）。正確なところは分かりにくい、模本から字体を検討すると、例えば「三」は3横画とも線の太さがほぼ一定で、筆鋒などは見られない。「于」も同様なものが多いが、中に横画に「策」的筆画がみられ、また「乙」には筆鋒らしきものもみられるが、総体的には筆画の線の太さが一定しているようである。

「一覧」追加資料⑨付図（模本）は、殷墟文化第三期、すなわち康丁・武乙・文丁の時代の柄形飾（石製）にみえる朱書文字である。6件の柄形飾（石製）の一面に2字が朱書され、「祖庚」「祖甲」「祖丙」「父？」「父辛」「父癸」の文字がある。柄形飾の長さは8.4～6.6cm。殷墟后岡の殷代小墓（M3）から出土し、同出の青銅器から、この墓の時代は「殷墟第三期」とされる（「1991年安陽后岡殷墓的發掘」）。模本から字体を検討すると、いずれの筆画とも線の太さがほぼ一定で、筆鋒などは見られない。この柄形飾の朱書文字について、徐暢は「玉箸体」の典型例の一つとし、「玉箸体」を定義して「葢頭護尾線條等粗」とする（「春秋戦国刻石簡牘帛書書法概論」11～13頁）。つまり、筆鋒のない、太さの均一な筆画の文字とする。これは「玉筋篆」とも呼ばれる。いわば篆字風の筆画もみられたということになる。

上述のように、筆写文字は殷代の陶器や玉器や石器などの素材や、また卜辞以前の時代にもみられた。そして、これらの毛筆書写文字は、曲線を基調とし、起筆と収筆が細く尖り、中間はやや太めの書体、いわゆる肥筆が多い。しかし、肥筆風の文字だけでなく、筆鋒のない太さの均一な筆画の文字、いわば篆字風の筆画もあり、さらには、「永字八法」の「策」的筆画もみられた。換言すれば、毛筆書写文字には、書かれる素材や器具の違い、副葬品か実用品かの違い、書写の手の違い、丁寧に書かれたものか草率に記されたものかの違い、などなどの条件が反映されている可能性が高い。

### 三、甲骨版（亀甲版と骨版）上の毛筆書写文字

甲骨版上の毛筆書写文字について、董作賓は『殷虚文字：乙編』（以下『乙編』と略称する）の序に「毛

筆書写的字跡、在乙編中是很常見的」とあるように、「常見」と述べる。また、劉一曼は甲骨版上にみえる朱書・墨書例の74片を取りあげ、亀版が48片、骨版が26片みられるとする（「試論殷墟甲骨書辞」）。

ちなみに、「墨書」と称せられる場合、墨色だけではなく、「褐色」を含む場合があるらしい。『甲骨学辞典』（上海辞書出版社、2009年）の「墨書」の項目に「甲骨学述語。用毛筆書写于甲骨上之墨色文字。殷墟出土商代占卜甲骨上的墨書、字体粗大、呈黑色和褐色、書写于甲骨反面。」とあり、同じく「朱書」の項目では「呈深紅色或赭色」とし、「黑色・褐色」と「深紅色・赭色」とを峻別する。本稿では墨書か朱書の相違については、各々の報告に従っておく。

添付の「一覧」にあるように、本節該当資料件数は、79件（⑩～⑥⑩、追加③～⑦、⑩～⑳⑳）、このうち、字形の比較的鮮明なものを取りあげ、その書体について検討したい。

これまでの、陶器上などの毛筆書写文字の考察から、毛筆書写文字の書体・書風について確認しておく。

毛筆による書体には、肥筆（波磔体）が標準体としてあり、これから「策」に近い線の横画、ならびに書画の線の太さがほぼ一定の筆画（玉箸体＝篆字風）が、その時々、その場合場合によって、派生したらしい。一文字の総画が肥筆の文字もあれば、一文字の一部に「磔」的筆画をふくむ文字、あるいは篆字風の筆画をふくむ文字がみられた、ということである。「運筆速度」の観点からは、肥筆（波磔体）を基準として、より速いのが「策」的筆画、より緩やかなのが篆字風（玉箸体）の筆画ということになる。

そこで、つぎに文字の筆画ごとに注意しつつ、「肥筆風」「篆字風」「その他」に大別して、検討したい。

#### A. 「肥筆風」の例

「肥筆風」の例は、次の11件になる。

「一覧」⑬（合集1285反面＝乙3400、第一期）付図（甲橋模本）。

朱書「不若于示」について、模本によれば、「不若」は肥筆で、起筆と収筆に鋭鋒がみえ、間の筆画の線は途中から太くなっている。「于示」の横画は均一な線であるが、縦画の収筆に鋭鋒がみえる。この4字（不若于示）は、一応、肥筆風としておく。亀材。

「一覧」⑭（合集1780反面＝乙3217、第一期）付



図(写真縮印)。

朱書「王固曰佳」「唐來三十3550」「其爭」について、縮小写真によれば、「三十3550」は肥筆で、3本の縦画の起筆に鋭鋒がみえ、縦画の3本ともにそれぞれ線の太さを異にする。他の文字は「玉箸体」と区別しにくい。「王固曰佳」は占辞、「唐來三十3550」は「記事」で卜辞ではない。亀材。

「一覧」⑮(合集5046反面=乙5625、第一期)付図(写真)。

朱書「五十3552」は「十」と「五」の合文であるが、写真によれば肥筆らしい。各の筆画に肥瘦があり、「玉箸体」とは判断できない。亀材。

「一覧」⑲(合集17301反面=乙3380、第一期)。図の出所は董作賓「発掘殷墟工作存真」の写真と乙3380(『乙編(二版)』)の写真。

墨書(朱書)は、「貞王其入(大?)御于?乙」「貞勿(御)于祖乙」「貞崇1540」「勿崇1540」である。図の写真の出所は董作賓「発掘殷墟工作存真」で、「亀甲反面之墨書」と記す。ところが、乙3380(『乙編(二版)』写真)の説明には「朱書・雜契刻・縮印」とあり、「朱書」とし、「契刻」文字をふくむとする。写真を熟視すると、甲橋記事と占辞は契刻文字らしい。筆写文字の、とりわけ「勿」「御」「崇1540」は肥筆で、起筆と収筆に鋭鋒がみえ、間の筆画の線は途中から太くなっている。亀材。

「一覧」㉔(合集18901反面=甲2940、第一期)付図(写真)。

朱書「大乙」「伐祖乙十人」(不鮮明)について、写真によれば「十人」は肥筆で、起筆と収筆に鋭鋒がみえ、筆画の線の太さを異にする。「祖」の筆画の線も、上が太めで下がるにしたがって細くなるように見える。図の写真の出所は、董作賓「発掘殷墟工作存真」で、「骨版反面之硃書」と記す。骨材。

「一覧」④(合集28089反面=掇二78反面、第三期)付図。

墨書「夕イ3335歳2429妣庚中」のいずれの文字も完璧ではないが、起筆と収筆に鋭鋒がみえ、筆画の線の太さを異にし、肥筆と知られる。「イ3335歳2429」は祭名。骨材。図の写真の出所は、掇二78反面である。なお、正面卜辞の分期分組について、楊・黄・彭3氏は「三・四期無名」とする。

「一覧」④③(合集29813反面=甲2636、第三期)付図(写真)。

朱書「多太乙日中」について、とりわけ「多太」は、起筆と収筆に鋭鋒がみえ、筆画の線の太さを異に

し、肥筆の典型例と知られる。図の写真の出所は、董作賓「発掘殷墟工作存真」で、「骨版反面之硃書」と記す。骨材。なお、正面卜辞の分期分組について、楊氏は「第三期何組」とする。

「一覧」④⑤(合集35256=寧滬1.217、第三期)付図。

墨書「乙五」の「乙」は起筆と収筆に鋭鋒がみえ、起筆と収筆の間の筆画の線も筆任せにやや太くなり、肥筆と知られる。胡厚宣は「乙五牢」と読む(『积文』)。陳夢家は「精華藏骨」とし「康丁」期のものとする(陳夢家書辞)。骨材。図の写真の出所は、『合集』である。

「一覧」⑤④(屯南2732・模本409)付図(写真・模本)。

朱書「遘羌甲」は、模本によれば、起筆と収筆に鋭鋒がみえる筆画が多く、肥筆の特徴がみられる。骨材。写真は不鮮明である。

「一覧」⑤⑥(屯南4163・模本407)付図(写真・模本)。

朱書「未祈1533」は、筆画に太さがあり肥筆の特徴が顕著である。积文は両字とも「祈1533」と読む。劉一曼は、「第三、四期」の書辞とする。骨材。

「一覧」追加⑫(村中村南488・写真図版181,182・模本図版154)付図(写真・模本)。

朱書「祖辛」は、「辛」の起筆と収筆に鋭鋒がみえるのと、「祖」の筆画に肥瘦があるところから、肥筆としておく。「祖」の字は、「日」の形に近く、『村中村南』の积文は「祖字之誤写」とする。また、『村中村南』は「朱書」とするが、褪色したらしく、写真では一部分墨書にみえる。正面卜辞(村中村南487)の分期については、第一期とする。骨材。

## B. 「篆字風」の例

「篆字風」の例は、つぎの22件である。

「一覧」⑩(合集201反面=丙416、第一期)付図(写真)。

朱書「王固曰」「貞南」「王(固)曰佳父乙」について、とりわけ「父乙」の「父」は、筆画の線は一定の幅で美的曲線を描き、「玉箸体」である。「乙」は肥筆例が多いが、この文字の場合、起筆と収筆の鋭鋒が鮮明でなく、筆画の線は一定の幅を保ち、肥筆のように膨らんでいないところから、「小篆風」の例としておく。亀材。

「一覧」⑫(合集419反面=乙6722+=丙329、第一期)付図(写真)。

朱書「執2593」「我2499」などがみえるが、とりわけ「執2593」は、筆画の線が一定の幅を保っているところから、「玉箸体」と判断しておく。亀材。

「一覧」⑬(合集9775反面=乙6423、第一期)付

図(写真)。

大字朱書「未?」と「蜀0627受年」、一応このように読んでおくと、正確ではない。いずれも筆画の線は一定の幅を保ち、美しい曲線を作っている。「葺頭護尾」で筆鋒が見えないところから、「玉箸体」と判断しておく。亀材。

「一覧」①⑨(合集9783反面=丙283、第一期)付図(写真)。

朱書「畫入二」、とりわけ「畫」は、筆画の線が一定の幅で美的曲線を描き、「玉箸体」である。「入二」は不鮮明。卜辞ではなく「記事」である。亀材。

「一覧」②⑩(合集9791反面=丙374、第一期)付図(模本)。

朱書「辛巳卜賓2065」は、模本によると、筆画の線が一定の幅で曲線を描き、「玉箸体」である。亀材。

「一覧」②⑪(京津2、合集12628は正面〈京津1〉のみで、正面の分期は第一期)付図(模本)。

朱書「畫來三十3550」は、模本によると、筆画の線が一定の幅で曲線を描き、「玉箸体」である。卜辞ではなく「記事」である。亀材。

「一覧」②⑫(合集13506反面=丙146、第一期)付図(写真)。

朱書「畫入三」、とりわけ「畫」は、筆画の線が一定の幅で美的曲線を描き、「玉箸体」である。「入三」は不鮮明。卜辞ではなく「記事」である。亀材。

「一覧」②⑬(合集13333反面=乙7277+ = 丙539、第一期)付図(写真・模本)。

朱書「王固曰翌1908乙酉不」の写真、とりわけ「乙」と「不」は、筆画の線が一定の幅で曲線を描く。また、模本では「曰・乙・酉・不」の4字の字体が確認でき、「玉箸体」と判断できる。占辞である。亀材。

「一覧」②⑭(合集14208反面=乙701+ = 丙109、第一期)付図(写真・模本)。

朱書(褐書)「畫乞3326四十3551」、「畫」「乞」の筆画の線が一定の幅で筆鋒は見えないところから、「玉箸体」である。「四十」の縦画の左端の筆画は褪色し、写真では見えにくい、下の横画の長さから、縦画が4本あったことが知られる。『丙編』の積文は「三十」とする。卜辞ではなく「記事」である。亀材。

「一覧」②⑮(合集14542反面+ = 乙7285+、第一期)付図(写真)。

朱書「(王) 固曰其雨」「甲子雨」ほか。李宗焜『当甲骨遇上考古』(65頁)の写真からは、左端にも筆写文字があるらしい。比較的鮮明な文字は、い

れの筆画の線も一定の幅であり、「玉箸体」と判断できる。乙7285の写真(『乙編(二版)』)によれば、「甲子雨」の「甲」の横画の起筆は側筆らしく、そのまま「磔」に近い線にも見える。占辞である。亀材。

「一覧」③⑯(合集18899反面=乙6795、第一期)付図(写真)。

朱書「自古2932乞晋0793四十3551」。「自」の上部に筆鋒があるが、これ以外の筆画の線は一定の幅で、曲線を描いているところから「玉箸体」としておく。卜辞ではなく「記事」である。亀材。

「一覧」③⑰(合集18902反面=乙6849、第一期)付図(写真)。

朱書で先写したのち契刻途中の例が「出3350疾」、未刻で朱書のままの例が「(固曰) 巷1842」である。とりわけ、朱書の「巷1842」は、筆画の線の太さが一定しており、「玉箸体」の典型の一例とみられる。占辞である。亀材。「先写後刻」例として貴重な朱書である。

「一覧」③⑱(合集18903=乙778、第一期)付図(写真)。

朱書「貞翌1908丙亡其从雨」「今日…」。「雨」の縦画3本の収筆に鋭鋒がみられる以外、いずれの筆画の線も一定の幅であり、全体としては「玉箸体」と判断できる。亀材。

「一覧」③⑲(合集18904=乙566、第一期)付図(写真)。

朱書「今」「其」。両字いずれも筆画の線の太さが一定の幅であるところから、「玉箸体」と判断できる。亀材。

「一覧」③⑳(合集18905反面=乙7652、第一期)付図(写真)。

朱書「畫入乞四十3551」。いずれの文字も筆画の線が一定の幅で、曲線を描いているところから「玉箸体」と知られる。卜辞ではなく「記事」である。亀材。

「一覧」③㉑(合集18906=乙5465、第一期)付図(写真)。

朱書「固」。「固」の文字の一部を欠くが、残部の筆画の線が一定の幅であるところから「玉箸体」と判断しておく。占辞である。亀材。

「一覧」③㉒(合集18909=乙6824、第一期)付図(写真)。

朱書「王固曰」。「王」と「固」と「曰」の文字の一部を各々欠くが、残部の筆画の線が一定の幅であるところから「玉箸体」と判断しておく。占辞である。亀材。

「一覧」④①(合集35260=甲870、歴組)付図(写真)。

朱書「甲申(卜) 彡乞3326賚?」。「甲申」に肥筆





たことが、以上の例から知られる。

#### 四、おわりに

1965年、貝塚茂樹は「甲骨文と金文の書体」というテーマで、殷代後期の書体の変遷について、甲骨文の書風の変化は、最終的に筆写体へ向かい、鹿頭文字と殷代後期の金文は、より筆写体の原物に近いものがあり、さらに筆写体をもとに金文の書体は分化し変化した、との説を提示した（『書道全集1（中国1殷周秦）』）。そこでは、とりわけ甲骨文について、「甲骨文の書風の変化は、第一期には契刻体と筆写体の二つの書体が相互に働きかけ合いながら発展し、だいたい契刻体より筆写体への転化の方向を取り、第五期の小字は甲骨文における筆写体の最後の勝利を意味する（19頁）」と結論した。

「甲骨文の書風の変化」については、すでに1940年の「甲骨文字書体の変遷」ならびに1946年の『中国古代史学の発展』第一部第二章第三節「甲骨文断代研究法の書体変遷観の批判」において、董作賓の「甲骨文断代研究例（十、書体）」の甲骨文字書の時代的変遷観に対する批判として提示された。董作賓の甲骨文の「作風」説、すなわち「雄偉（第一期）」「勤筋（第二期）」「頹廢（第三期）」「勁峭（第四期）」「嚴整（第五期）」という、宗教的政治的観点からの一元的変遷観に対して、貝塚説は、美術的観点から契刻体（直線・折線イメージ）と筆写体（曲線イメージ）との相互の関係として、書風の変遷を二元的にとらえ、最終的に筆写体に似せて、甲骨文が契刻されるようになる、とする。換言すると、契刻された甲骨文字は筆写体に始まり（第一期師組・子組〈図B1・図B2〉）、筆写体に終



図B2



図C

わる（第五期黄組〈図C〉）という主張である。

本稿の考察から、卜辞と同版に、いくつかの書風や書体で毛筆書写された文字が多数みられたところから、当時の「識字」者たちの標準的書体は、筆写体（曲線イメージ）であり、「甲骨文と金文の書体」の基底には、筆写文字が常に意識されていた、という貝塚茂樹説を大筋で確認できたということになる。

#### ◎引用文献・参考文献ならびに略称◎

《甲骨卜辞など・略称》

- 誕 『中国的誕生』（顧立雅著、1936年）
- 鄴三 『鄴中片羽第三集』（黄浚編著、1942年）
- 甲 『小屯・殷虚文字甲編』（董作賓編著、中央研究院歴史語言研究所、1948年）
- 乙 『小屯・殷虚文字乙編（二版）』（董作賓編著、中央研究院歴史語言研究所、1994年。初版は1948年～1953年）
- 寧滬 『戦後寧滬新獲甲骨集』（胡厚宣編著、



図B1

- 1951年)
- 掇二 『殷契拾掇第二編』(郭若愚編、1953年)
- 京津 『戦後京津新獲甲骨集』(胡厚宣編著、1954年)
- 丙 『小屯・殷虚文字丙編』(張秉樞編著、中央研究院歷史語言研究所、1957~72年)
- 合集 『甲骨文合集』(郭沫若主編、中華書局、1978~1983年)
- 屯南 『小屯南地甲骨〈上下〉』(中国社会科学院考古研究所編、中華書局、1980年〈上〉1984年〈下〉)
- 補乙 『小屯・殷虚文字乙編補遺』(鍾柏生主編、中央研究院歷史語言研究所、1995年)
- 合集補 『甲骨文合集補編』(中国社会科学院歷史研究所編、語文出版社、1999年)
- 村中村南 『殷墟小屯村中村南甲骨〈上下〉』(中国社会科学院考古研究所編著、雲南人民出版社、2012年)
- 《引用著書(略称)》
- 『甲編』 『小屯・殷虚文字甲編』(董作賓編著、中央研究院歷史語言研究所、1948年)
- 『乙編』 『小屯・殷虚文字乙編(二版)』(董作賓編著、中央研究院歷史語言研究所、1994年。初版は1948年~1953年)
- 『綜述』 『殷虚卜辞綜述』(陳夢家、科学出版社、1956年。本稿本文ならびに一覧中の「陳夢家「書辞」引用例」は、『綜述』第一章總論第三節・第七節引用「書辞」例を指す。)
- 『丙編』 『小屯・殷虚文字丙編』(張秉樞編著、1957年~72年)
- 「董氏乙編模写」「殷虚文字乙編模写本示例」(『董作賓全集・乙編』第7冊、藝文印書館、1977年)
- 『合集』 『甲骨文合集』(郭沫若主編、中華書局、1978~1983年)
- 『屯南』 『小屯南地甲骨〈上下〉』(中国社会科学院考古研究所編、1980年〈上〉1984年〈下〉)
- 『丁編』 『小屯・遺址的發現与發掘・丁編一甲骨坑層之一』(石璋如編著、中央研究院歷史語言研究所、1985年)
- 『模积総集』 『殷虚甲骨刻辞模积総集』(姚孝遂主編、中華書局、1988年)
- 胡厚宣『积文』 『甲骨文合集积文』(胡厚宣主編、中国社会科学出版社、1999年)
- 『村中村南』 『殷墟小屯村中村南甲骨〈上下〉』(中国社会科学院考古研究所編著、雲南人民出版社、2012年)
- 『新研』 『殷墟YH127坑賓組甲骨新研』(張惟捷、萬卷楼、2013年)
- 『新編』 『殷虚文字丙編模积新編』(張惟捷・蔡哲茂、中央研究院歷史語言研究所、2017年)
- 《引用および参考著書・論文名》
- 董作賓 「甲骨文断代研究例(十、書体)」(『歷史語言研究所集刊外編-慶祝蔡元培六十五歲論文集』、1933年)
- 貝塚茂樹 「甲骨文字書体の變遷」(『書苑』第4卷第2号、1940年)
- 黄浚 『鄴中片羽第三集』(1942年)
- 貝塚茂樹 『中国古代史学の發展』(弘文堂、1946年)
- 貝塚茂樹 「甲骨文断代研究法の書体變遷觀の批判」(『中国古代史学の發展』1946年)
- 董作賓 「三千年前毛筆書写之文字」(『發掘殷墟工作存真(1948年)』『董作賓全集・乙編』第7冊、藝文印書館、1977年)
- 胡厚宣 『殷墟發掘』(学習生活出版社、1955年)
- 屈万里 『小屯・殷虚文字甲編』(中央研究院歷史語言研究所、1961年)
- 鄒衡 「試論殷墟文化分期」(『夏商周考古学論文集』文物出版社、1980年。原載1964年)
- 貝塚茂樹 「甲骨文と金文の書体」(『書道全集1(中国1殷周秦)』平凡社、1965年)
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「安陽小屯村北的兩座殷代墓」(『考古学報』1981年第4期)
- 林巳奈夫 『殷周時代青銅器の研究』(吉川弘文館、1984年)
- 石璋如 『小屯・遺址的發現与發掘：丁編一甲骨坑位之一』(中央研究院歷史語言研究所、1985年)
- 安陽市博物館「安陽市鉄西殷墟劉家莊南殷代墓葬發掘簡報」(『中原文物』1986年第3期)
- 劉一曼 「試論殷墟甲骨書辞」(『考古』1991年第6期)
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1991年安陽后岡殷墓的發掘」(『考古』1993年第10期)
- 中国社会科学院考古研究所 『殷墟的發現与研究』(科学出版社、1994年)
- 徐暢 「春秋戰国刻石簡牘帛書書法概論」(『中国書法全集』第4卷、榮寶齋、1996年)
- 王輝 「殷墟玉璋朱書文字蠡測」(『文博』1996年第5期)
- 『中国歴史紀年手冊』(気象出版社、2002年)
- 孟憲武 「殷墟出土的玉璋朱書文字」(『安陽殷墟



考古研究』中州古籍出版社、2003年)

- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「安陽殷墟劉家莊北1046墓」(『考古学集刊』第15集、2004年)
- 李宗焜『当甲骨遇上考古－導覽YH127坑』(王汎森主編、中央研究院歷史語言研究所、2006年)
- 李健民「陶寺遺址出土的朱書“文”字扁壺」(『襄汾陶寺遺址研究』(科学出版社、2007年)
- 程鵬万「劉家莊北M1046出土石璋上墨書“?”字解积」(『古文字研究』第27輯、2008年)
- 孟世凱『甲骨学辞典』(上海辞書出版社、2009年)
- 河南省文物考古研究所『鄭州小双橋』(科学出版社、2012年)
- 吳雪飛「安陽小屯18号墓出土玉戈朱書考」(『殷都学刊』2016年第2期)
- 小南一郎「漢字の出現－大口尊を中心にして」(『泉屋博古館紀要』第33卷、2017年)
- 鈴木舞『殷代青銅器の生産体制』(六一書房、2017年)
- 李峰『青銅器和金文書体研究』(上海古籍出版社、2018年)

《その他》

- 引用甲骨文字に付した4桁のアラビア数字は、姚孝遂主編『殷墟甲骨刻辞類纂』(中華書局、1989年)の字形總表の文字番号である。文字の諸説を集めた于省吾主編『甲骨文字詁林』(中華書局、1996年)の文字番号に同じである。
- 甲骨文字の分期分組の諸説について、賓組については、『賓組甲骨文分類研究』(崎川隆、上海人民出版社、2011年、「崎川分類」と略称する)、その他については、楊郁彦『甲骨文合集分組分類総表』(藝文印書館、2005年)を参照する。

追記：「一覧」付図は、紙幅の関係をはじめ諸般の事情で割愛する。

筆写文字資料一覧

- ①「文」ほか。朱書(模本)。扁壺。陶寺文化晩期(約前2200～前2000)出土。模本の出所は李健民「陶寺遺址出土的朱書“文”字扁壺」図一(『襄汾陶寺遺址研究』(科学出版社、2007年)。
- ②「二・天・尹・𠄎3356?・旬?・帚・匕(人)・東・夭・三・阜1273?・七?・𠄎1976?」ほか。朱書。殷代中期の鄭州小双橋遺跡(前1435～1412)出

土の陶器残片上にみえる(『鄭州小双橋』第五章「朱書文字与刻劃符号」彩版二八「小双橋遺址出土朱書文字」(科学出版社、2012年)。

これらの文字の陶器上の位置と出土地点はつぎの通り(模糊文字をふくむ)。

- 「二(大型缸類口沿外表面・T74④出土)」
- 「天(大型缸類口沿外側表面・H101出土)」
- 「尹(大型缸類腹部表面・H81出土)」
- 「𠄎3356?(大型缸類腹部表面(模本)・H185出土)」
- 「旬?(小型缸類腹部表面・G3出土)」
- 「帚・匕(人)・?(小型缸類腹部表面・H43出土)」
- 「東・夭(小型缸類腹部表面・H165出土)」
- 「三(小型缸類口沿内壁・H51出土)」
- 「阜1273?(大型缸類口沿内壁・H100出土)」
- 「七?(小型缸類腹部表面・G3出土)」
- 「𠄎1976?(小型缸類腹部表面・H50出土)」
- 「?(大型缸類腹部内壁・H100出土)」
- 「?(大型缸類腹部表面・T92④出土)」
- 「?(小型缸類腹部表面・G3出土)」
- 「?(小型缸類腹部表面・H29出土)」
- 「?(小型缸類内壁・H29出土)」
- 「?(小型缸類口沿外表面・H56出土)」
- 「?(器蓋表面・T105③出土)」

③「口・弋?・畢・征・雨」。朱書(模本)。陶器(鉢)の内側。小屯村東北87H1(殷墟第一期偏早期)出土。模本の出所は、中国社会科学院考古研究所『殷墟的發現与研究』図131(科学出版社、1994年)。

④「祀」。墨書。白陶残片。小屯のE181出土。写真の出所は董作賓「三千年前毛筆書写之文字」(『發掘殷墟工作存真(1948年)』『董作賓全集・乙編』第7冊、藝文印書館、1977年)で、写真の左は骨版刻字(甲3687=合集37834)で、陶器残片と同じ出土地点である。いずれも殷墟文化第四期に属す(鄒衡「試論殷墟文化分期」図一(『夏商周考古学論文集』文物出版社、1980年)、『小屯・遺址的發現与發掘：丁編一甲骨坑層之一』(中央研究院歷史語言研究所、1985年。以下『丁編』と略称する)参照)。

⑤「鼂于丁」。朱書。玉器残片。出所は黄浚『鄴中片羽第三集』(1942年)卷下27葉にみえ、この「總目」には「朱書鼂于丁残玉」と題す。安陽出土品とされる。

⑥「在泚執𠄎?在入」。朱書(模本)。玉戈。婦好墓と同時代とされる墓(M18)から出土。模本の出所は「安陽小屯村北的兩座殷代墓」図11-1(『考

古学報』1981年第4期)

- ⑦「?于某或一」の文の形をとり、「某」には「白・辛・小史・公・祖甲」などが入る。朱書(写真と模本)、玉璋(十七片)。殷墟文化第四期。劉家莊南殷墓(M42,54,57,64)出土。写真と模本の出所は、孟憲武「殷墟出土的玉璋朱書文字」(『安陽殷墟考古研究』中州古籍出版社、2003年)。帝乙・帝辛(紂王)の時代とされる(同上)。
- ⑧「小戠2415出」。墨書。石器。殷墟出土。写真の出所は、董作賓「發掘殷墟工作存真(三十七年七月二十一日芝城)中の「三千年前毛筆書寫之文字・石器上之墨書」」。董作賓が「墨書」とするのに対し、胡厚宣は「朱書」とし、西北岡1001号大墓出土とする(『殷墟發掘』(学习生活出版社、1955年)図42)。実物を知る董作賓にしたがう。
- ⑨「小臣??挿1038?」。朱書(写真と模本)。石磬。写真と模本の出所は、『殷墟卜辭綜述』図版17。「晚殷時期」とされる(同上46頁)。
- ⑩「王固曰」「貞南」「王(固)曰佳父乙」。合集201反面=丙416、亀材、朱書(「朱書雜契刻」)、第一期・過渡②(崎川分類)・賓組一B、「YH127」出土。図の出所は『乙編(再版)』(写真)と『新編』(模本)。
- ⑪「王」「吉」。合集376反面=丙97、亀材、朱書(「朱書雜契刻」)、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『丙編』(写真)。
- ⑫「執2593」「我2449」ほか。合集419反面=乙6722+=丙329、亀材、朱書、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『乙編(再版)』(写真)。『丙編』積文は、「朱書殘辭」として「受黍年」などを読む。
- ⑬「不若于示」。合集1285反面=乙3400(陳夢家「書辭」引用例)、亀材、朱書、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『乙編(再版)』(写真縮印ならびに「甲橋模本」)。
- ⑭「王固曰佳」「唐來三十3550」「其爭」。合集1780反面=乙3217(陳夢家「書辭」引用例)、亀材、朱書、(正面卜辭)第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『乙編(二版)』(写真縮印)。張惟捷『新研』(224~5頁)は「唐來三十」を「墨書未刻」とするのみ。
- ⑮「五十3552」。合集5046反面=乙5625、亀材、朱書、(正面卜辭)第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『乙編(二版)』(写真)。胡厚宣『積文』は「墨書」とする。
- ⑯「出3350母己…☆0227出3350卯宰」「貞王甫2198人正」「王(勿)佳人」。合集6475反面=丙27=乙7775+、亀材、朱書(「朱書雜契刻」)、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『乙編(二版)』(写真)と『新編』(模本)。「貞」「王」「正」などの一部はみえるが、全体に不鮮明。
- ⑰「貞之」「史」「奠」ほか。合集9177反面=丙158、亀材、朱書(「朱書雜契刻」)、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『新編』(模本)。
- ⑱「未」「蜀0627受年」。合集9775反面=乙6423(陳夢家「書辭」引用例)、亀材、朱書(「朱書雜契刻」)、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『乙編(二版)』(写真縮印)。
- ⑲「畫入二」。合集9783反面=丙283、亀材、「甲橋朱書」、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。『丙編』写真では、「畫」が鮮明、「入二」は不鮮明。
- ⑳「辛巳卜賓2065」。合集9791反面=丙374、亀材、「朱書」、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。『丙編』写真では、「賓2065」が鮮明。模本の出所は『新編』。
- ㉑「王」「正夷方」「一宰」(写真・模本なし)。合集11738(反面)=甲2500(反面)(陳夢家「書辭」引用例)、骨材、朱書、第三期(陳夢家説)、「横十三・二五乙」出土。屈万里の分期は空欄となっており、考釈には「背面有朱書未刻之辭、云“王□正夷方、…一宰…”。未影撰付印」とある。正面に刻まれた干支表の分期分類について、崎川分類は「賓三類(典型)」とする。
- ㉒「畫來三十3550」。京津2(合集12628)(陳夢家「書辭」引用例)、亀材、朱書、(正面卜辭)第一期・過渡②(崎川分類)、推定「YH127」出土。模本の出所は『京津』。
- ㉓「畫入三」。合集13506反面=丙146、亀材、「甲橋朱書」、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。写真の出所は『丙編』。「入三」は鮮明ではない。
- ㉔「王固曰翌1908乙酉不」。合集13333反面=乙7277+=丙539、亀材、朱書、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。図の出所は『丙編』(写真)・『乙編(二版)』(写真)と『新編』(模本)。
- ㉕「貞帝不其令」「王固曰吉其」「貞弗其今…電」「今二月」ほか。合集14129反面+=乙6667+乙530+補乙358+補乙4951=丙66+(陳夢家「書辭」引用例)、亀材(背甲)、「朱書(雜契刻)」、第一期・過渡②(崎川分類)、「YH127」出土。模本の出

- 所は『新編』。
- ②⑥「畫3092乙3326三十3550（四十3551）」ほか。合集14208反面 = 乙701 + 丙109（陳夢家「書辭」引用例）、亀材、「朱書（褐書）」、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。「三十」は『丙編』の積文、「四十」は『新編』の積文。図の出所は『乙編（二版）』（写真）と『新編』（模本）。
- ②⑦「（丁亥）卜亘2285」。合集14468反面 = 丙536、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。『丙編』考釈は「朱書已褪色」とする。図の出所は『丙編』（写真）と『新編』（模本）。
- ②⑧「（王）固曰其雨」「甲子雨」。合集14542反面 + 乙7285 +、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真の出所は李宗焜『当甲骨遇上考古』（65頁）。
- ②⑨「貞王其入（大？）御于？乙」「貞勿（御）于祖乙」「貞崇1540」「勿崇1540」。合集17301反面 = 乙3380（陳夢家「書辭」引用例）、亀材、「墨書（朱書）」、第一期、（正面卜辭）第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真の出所は董作賓「發掘殷墟工作存真」で、「亀甲反面之墨書」と記す。ところが、乙3380は「朱書・雜契刻・縮印」とし、「契刻」文字をふくむとし、董作賓の解説と異なる。写真を熟視すると、甲橋記事と占辭は契刻文字らしい。
- ③⑩「自古2932乙卣0793四十3551」。合集18899反面 = 乙6795、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。図の出所は『乙編（再版）』（写真）。記事刻辭（甲橋）で亀版奉納と徵収などの関係を示す（「殷王朝の卜占制度概説（上・中・中2）」（『金蘭短期大学研究誌』第32～35号、2001～2003年）参照）。
- ③⑪「（王）固曰」合集18900反面 = 乙8202、亀材、「朱書」、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真の出所は『乙編（二版）』で「朱書雜契刻」とある。不鮮明である。
- ③⑫「大乙」「伐祖乙十人」。合集18901反面 = 甲2940（陳夢家「書辭」引用例）、骨材、朱書、第一期、「大連坑」出土。写真の出所は董作賓「發掘殷墟工作存真」で、「骨版反面之硃書」と記す。不鮮明である。
- ③⑬「（固曰）卷1842」。合集18902反面 = 乙6849、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真の出所は李宗焜『当甲骨遇上考古』（64頁）。
- ③⑭「貞翌1908丙亡其从雨」「今日…」。合集18903 = 乙778、亀材、朱書、第一期、「YH127」出土。写真の出所は李宗焜『当甲骨遇上考古』（63頁）。
- ③⑮「今」「其」ほか。合集18904 = 乙566（陳夢家「書辭」引用例）、亀材、朱書、第一期、「YH127」出土。写真の出所は李宗焜『当甲骨遇上考古』（68頁）。
- ③⑯「畫入乙四十3551」。合集18905反面 = 乙7652、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真の出所は『乙編（二版）』で「朱書」とある。
- ③⑰「固」。合集18906 = 乙5465、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真の出所は『乙編（二版）』で「朱書」とある。
- ③⑱「不」。合集18907 = 乙5536、亀材、朱書、第一期、「YH127」出土。写真の出所は『乙編（二版）』で「朱書」とある。
- ③⑲「王固曰」。合集18909 = 乙6824、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真の出所は『乙編（二版）』で「朱書」とある。
- ④⑩「六宰」（写真・模本なし）。合集27543（反面） = 甲2698（反面）（陳夢家「書辭」引用例）、骨材、朱書、（正面）第三期（屈万里説）、「大連東」出土。屈万里積文に「背面有朱書未刻之殘辭、文曰“…六宰。”与正面刻辭互倒、未影撰付印」とする。
- ④⑪「夕イ3335歲2429妣庚中」。合集28089反面 = （掇二78反面、骨材、墨書、第三期・無名（楊・黄・彭）。「イ3335歲2429」は祭名。写真の出所は合集28089反面。胡厚宣『積文』は「墨書」とする。「夕イ歲妣庚中」の文字は「歲」以外、比較的よく残っている。
- ④⑫（写真・模本なく、不能辨識の約十字がある、とされる）。合集29217（反面） = 甲3586（反面）（陳夢家「書辭」引用例）、骨材、朱書、（正面卜辭）第三期（屈万里説）、「F1（5：H2）」出土。屈万里積文に「本版背有朱書（已褪色）之辭、約十字内外、惜皆漫漶不能辨識」とする。
- ④⑬「多大乙日中」。合集29813反面 = 甲2636（陳夢家「書辭」引用例）、骨材、朱書、第三期何組、「大連東」出土。写真の出所は董作賓「發掘殷墟工作存真」で、「骨版反面之硃書」と記す。
- ④⑭「固」（写真・模本なし）。合集30966（反面） = 甲編図版112（甲2506 + 甲2509）（反面）（陳夢家「書辭」引用例）、骨材、朱書、（正面干支表）第一期（陳夢家説）・第三期（屈万里説）。屈万里積文に「背面有朱書未刻之辭、僅一“固”字可辨、未影撰付印」とする。
- ④⑮「乙五牢」。合集35256 = 寧滬1.217（陳夢家「書辭」引用例）、骨材、墨書。陳夢家は「精華藏骨」と



- し「康丁」期のものとする。陳夢家は、さらに「正面刻卜辞」を指摘するが、未確認である。図の出所は『合集』(写真)。
- ④⑥「癸酉」。合集35257(写真) = 寧滬2.56(陳夢家「書辞」引用例)、「正面刻卜辞」は「合集4284 = 寧滬2.55」、骨材、朱書。陳夢家は「精華蔵骨」とし「武丁」期の「朱書」とする。胡厚宣『釈文』は「墨書」とする。また、「正面刻卜辞」は第一期・過渡③(「典賓同版」とする(崎川分類)。図の出所は『合集』(写真)。『寧滬』は未確認。
- ④⑦「牛二在四月王」。合集35258(写真) = 合集41389(模本) = 寧滬1.250(陳夢家「書辞」引用例)、骨材、墨書。陳夢家は「精華蔵骨」とし「武文」期のものとする(陳夢家書辞)。図の出所は『合集』(写真・模本)。『寧滬』は未確認。
- ④⑧「妣庚」。合集35259 = 寧滬1.219(陳夢家「書辞」引用例)、骨材、墨書。陳夢家は「精華蔵骨」とし「武文」期のものとする。図の出所は『合集』(写真)。『寧滬』は未確認。
- ④⑨「甲申(卜) 𠄎 乞3326 賚?」ほか。合集35260 = 甲870(陳夢家「書辞」引用例)、骨材、「墨書(墨色淡黄微褐)」、歴組、「連連二」出土。屈万里は、もともとは朱書とし、第四期出土とする(『甲編』考釈)。歴組卜辞版と同坑・同深度・同時出土から歴組の時代としておく(『丁編』参照)。図の出所は『甲編』(写真)。
- ④⑩「…??王」。屯南1028・模本403、骨材、朱書、屯南「H24」出土。釈文は「除“王”字外皆不識」とする。劉一曼は、「第三、四期」の書辞とする。
- ④⑪(文字判別不能)。屯南1427・模本404、骨材、朱書、屯南「H24」出土。釈文は「字跡不清」とする。
- ④⑫「玉3259?」。屯南1453・模本405、骨材、朱書、屯南「H24」出土。釈文は「有一残字」とする。
- ④⑬「歳」。屯南2011・模本406、骨材、朱書、屯南「H24」出土。劉一曼は、「第三、四期」の書辞とする。
- ④⑭「遘羌甲」。屯南2732・模本409、骨材、朱書、屯南「H24」出土。正面の「屯南2732」は、習刻。
- ④⑮「□巳卜□庚…?」(写真・模本なし)。屯南2740、骨材、「朱書」、屯南「H103」出土。釈文は「康丁」期とし、「此版還有朱書“□巳卜□庚…?”とある。
- ④⑯「未祈1533」。屯南4163・模本407、骨材、朱書、屯南「T31③」出土。釈文は両字とも「祈1533」と読む。劉一曼は、「第三、四期」の書辞とする。
- ④⑰「三工2905」。屯南4187・模本408、骨材、朱書、屯南「T31③」出土。釈文は「三…」とするのみ。
- ④⑱「日來」。屯南4194・模本410、骨材、朱書、屯南「T31③」出土。劉一曼は、「第三、四期」の書辞とする。
- ④⑲(写真・模本なし)。甲2662(反面) = 合集未見(陳夢家「書辞」引用例)、骨材、朱書、第一期(陳夢家説)、第三期(屈万里説)。屈万里釈文に「背面有朱書之文、惜模糊不能辨識」とする。
- ④⑳「丁未卜永」。乙5867 = 合集補3539反面、亀材、「朱書と契刻(先写後刻例)」、第一期、「YH127」出土。写真の出所は李宗焜『当甲骨遇上考古』(76頁)、拓本の出所は『乙編(二版)』。
- 追加①「大示崇1842」(陳夢家「書辞」引用例)。陳夢家は「玉器」とし、また「魚佩」とする(陳夢家「書辞」引用例)。出所不記。
- 追加②「占3049侯2558」(陳夢家「書辞」引用例)。陳夢家は「玉戈」とし、また「小屯発掘」とする(陳夢家「書辞」引用例)。出所不記。
- 追加③「〈字形・字数とも不明〉」(陳夢家「書辞」引用例)。陳夢家は「腹甲上半、正面刻卜辞」すなわち亀材で、正面には卜辞が刻まれているとし、また「武丁朱書」すなわち武丁期の朱書とし、出所は『文物週刊』40期図六とする(陳夢家「書辞」引用例)。未確認である。
- 追加④「〈字形・字数とも不明〉」寧滬1.579(陳夢家「書辞」引用例)。陳夢家は「精華蔵骨」すなわち清華大学所蔵の骨材とし、「武文墨書」すなわち武乙・文丁期の墨書とし、「正面(寧滬1.578)刻卜辞」すなわち正面には卜辞が刻まれているとする(陳夢家「書辞」引用例)。「精華蔵骨」というのは、清華大学が胡厚宣旧蔵の甲骨版を購入したものである(『綜述』655頁)。未確認である。
- 追加⑤「〈字形・字数とも不明〉」掇二400(陳夢家「書辞」引用例)。陳夢家は「武文墨書」すなわち武乙・文丁期の墨書とする(陳夢家「書辞」引用例)。『合集』未見。亀材か骨材か不記。未確認である。
- 追加⑥「〈字形・字数とも不明〉」掇二401(陳夢家「書辞」引用例)。陳夢家は「武文墨書」すなわち武乙・文丁期の墨書とする(陳夢家「書辞」引用例)。『合集』未見。亀材か骨材か不記。未確認である。
- 追加⑦「于」乙514 = 丙488 = 合集98反面(陳夢家「書辞」引用例)。亀材、墨書、第一期・賓一類(崎川分類)。張惟捷『新研』は「『王』字下疑有『于』字殘筆、已漫漶難辨」とする。刻字「王」の下の部位に「于」らしき文字があったらしい。

- 追加⑧「尊于某」との形で書かれ、「某」には「大子丁」「祖乙」「祖丁」「?子癸」「長子癸」「中子癸」「三辛」「垂辛」「某君乙」「某君丁」などの固有有名が来る。墨書（模本）。石璋（18件）。殷墟文化第四期晩期。殷墟劉家莊北の殷代貴族墓（M1046）からの出土（「安陽劉家莊北1046墓」『考古学集刊』第15集、2004年）。程鵬万「劉家莊北M1046出土石璋上墨書“?”字解釈」『古文字研究』第27輯、2008年）参照。
- 追加⑨「祖庚」「祖甲」「祖丙」「父?」「父辛」「父癸」。朱書（模本）。柄形飾（6件・石製）の一面に2字ずつみえる。柄形飾の長さは8.4~6.6cm。殷墟文化第三期（康丁・武乙・文丁の時代）。殷墟后岡の殷代小墓（M3）から出土（「1991年安陽后岡殷墓の発掘」）。徐暢は「玉箸体」の典型例の一つとし、「玉箸体」を定義して「箴頭護尾線條等粗」とする（「春秋戦国刻石簡牘帛書書法概論」11~13頁）。
- 追加⑩「戊申卜」（村中村南436・写真図版137・模本図版122）。骨材。朱書（写真・模本）。『村中村南』は「朱書」とし、分期は第一期とする。朱書は褪色している。
- 追加⑪「?灌犀」（村中村南471・写真図版167,168・模本図版144）。骨材。朱書（浅紅褐色）（写真・模本）。「?灌犀」について、『村中村南』の釈文は「義不明」とする。正面卜辞（村中村南470）の分組は午組とされる。
- 追加⑫「祖辛」（村中村南488・写真図版181,182・模本図版154）。骨材。朱書（写真・模本）。「祖」の字は、「日」の形に近く、『村中村南』の釈文は「祖字之誤写」とする。また、『村中村南』は「朱書」とするが、褪色したらしく、写真では一部分墨書にみえる。正面卜辞（村中村南487）の分期については、第一期とする。
- 追加⑬「固日」（模本）。乙643反面（13.0.977+13.0.918反面）、亀材、墨書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。模本の出所は董作賓「殷虚文字乙編模写本示例」（以下「董氏乙編模写」と略称する）である。
- 追加⑭「吉汴0804?」（模本）。乙645反面、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。模本の出所は「董氏乙編模写」である。
- 追加⑮「?入五十」（写真）。乙3408=合集98反面、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。甲橋記事である。朱書は不鮮明で、読みは『乙編（二版）』による。
- 追加⑯「〈字形・文字数不明〉」（写真）。乙7361=合集8796反面、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。甲橋記事である。朱書は不鮮明で、読み取れず。
- 追加⑰「〈字形・文字数不明〉」（写真）。乙7763=合集15563反面、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。甲橋記事である。朱書は不鮮明で、読み取れず。
- 追加⑱「入」（模本・写真無し）。丙95=合集7103反面、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。甲橋記事である。朱書「入」の読みは『丙編』の張秉権の考釈による。
- 追加⑲「〈字形・文字数不明〉」（模本・写真無し）。丙315=合集6468、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。「朱書の痕跡」の指摘は『丙編』の張秉権の考釈にみえる。
- 追加⑳「从汴0804」「王固曰…汴0804戛2422…巴」（写真）。丙399=合集93反面、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真は不鮮明。読みは『丙編』の張秉権の考釈による。
- 追加㉑「崇1540」（写真）。丙420=合集1385反面、亀材、朱書、第一期・賓一類（崎川分類）、「YH127」出土。「崇1540」の文字の筆画の線の太さが均一で、小篆風にみえる。
- 追加㉒「（貞勿）崇1540」「貞妣」「（貞）不（?）」「貞…」（写真）。丙439=合集734反面、亀材、朱書、第一期・賓一類（崎川分類）、「YH127」出土。写真は不鮮明。読みは『丙編』の張秉権の考釈による。『新編』参照。
- 追加㉓「貞…雨…固」（写真）。丙520=合集973反面、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。写真は不鮮明。読みは『丙編』の張秉権の考釈による。
- 追加㉔「〈字形・文字数不明〉」（写真）。丙594=合集488反面、亀材、朱書、第一期・過渡②（崎川分類）、「YH127」出土。朱書について、『丙編』の張秉権の考釈に「在尾甲上有若干朱書」とある。ただし、不鮮明で読み取れないとする。
- 追加㉕「〈字形・文字数不明〉」（模本）。「13.0.650+13.0.651反面」、亀材、朱書、「YH127」出土。「董氏乙編模写」の解説に「有朱書筆痕多處模糊不可辨認」とある。
- 追加㉖「?」。「13.0.702反面」（模本）、亀材、墨書、「YH127」出土。「董氏乙編模写」の解説に「墨書一字筆畫不盡可辨」とある。
- 追加㉗「貞」。「13.0.829反面」（模本）、亀材、墨

書、「YH127」出土。「董氏乙編模写」の解説に「墨書非契刻」とある。

- 追加㉔「〈今??〉」。「13.0.954反面」(模本)、亀材、墨書、「YH127」出土。「董氏乙編模写」の解説に「墨書筆畫不盡可辨」とある。
- 追加㉕「〈字形・文字数不明〉」(模本)。「13.0.937反面」、亀材、朱書、「YH127」出土。「董氏乙編模写」の解説に「有朱書痕字不能辨」とある。
- 追加㉖「〈字形・文字数不明〉」(模本・写真無し)。京津1266(合集6476)反面(劉一曼「試論殷虚甲骨書辭」<sup>⑩⑰</sup>)引用例)、亀材、「書辭」、(正面卜辭)第一期・過渡<sup>②</sup>(崎川分類)、推定「YH127」出土。劉一曼「試論殷虚甲骨書辭」<sup>⑩⑰</sup>に「書辭發表于胡厚宣的《戰後殷虚出土的大龜七版(三)》《文物周刊》第24期、1947年」とある。
- 追加㉗「〈字形・文字数不明〉」(写真)。誕6 = 合集18908、亀材、「書辭」(劉一曼「試論殷虚甲骨書辭」<sup>⑩⑱</sup>引用)。写真は『合集』にみえるが、不鮮明で読めない。『模稜総集』は「辛丑卜…」と読み、胡厚宣『積文』は「癸…卜…貞…」 「…巳卜…貞…勿…」と読む。
- 追加㉘「〈字形・文字数不明〉」(模本・写真無し)。「3.2.0922反面」(劉一曼「試論殷虚甲骨書辭」<sup>⑩⑲</sup>)引用例)、骨材、「書辭」、劉一曼「試論殷虚甲骨書辭」<sup>⑩⑲</sup>に「胡厚宣：《戰後殷虚出土的新大龜七版(八)》《文物周刊》第30期、1947年」とある。